関西支部行事「京都五山送り火鑑賞会」について

関西支部の名物行事とも言われた「京都五山の送り火鑑賞会」に関する記録ページです。
保高 前支部長のご厚意により、支部内同好会である「古都を巡る会」の一環として始められ、20年以上にわたり延べ400名以上の同窓生が体験させていただきました。

■あなたの写真をお送りください。当欄に掲載させていただきます。

（2016年8月　保高 前支部長より聞き取り）

20年前に支部長に就任した際に支部内の親睦を深めようと、同好会「古都を巡る会」を始めました。
有志の参加を募り、祇園祭、時代祭、送り火、鞍馬の火祭などの集いを実施し、中でも送り火鑑賞会については、私が山の関係者であることから特に思い入れがあり、幾度となく開催してきました。関西支部50回記念総会に取り入れた際は、総勢100名を超える参加がありました。累計すると参加された方は300名を越えていることでしょう。
火床にて点火作業が見られるのはこの左大文字だけで、眼下に広がる京都市街の夜景は心に響くものがあり、貴重な体験になるものと確信します。いかんせん人数の限られる行事であるため、いつも参加ご希望に添い切れぬことを申し訳なく思っています。
「古都を巡る会」の活動費用は、本部・支部からの補助に頼らず参加者に全額ご負担いただいてるのと、世話役がおらず準備に手間取っているのが悩みです（笑）。

次頁につづく

■京都五山の送り火について

京都の夏を彩る風物詩といえば、夏の夜空にくっきりと浮かび上がる「五山の送り火」。東山如意ヶ嶽の「大文字」、松ヶ崎西山・東山の「妙・法」、西賀茂船山の「船形」、金閣寺付近大北山（大文字山）の「左大文字」及び嵯峨仙翁寺山（万灯籠山・曼荼羅山）の「鳥居形」が8月16日の夜に相前後して点火され、これが「京都五山送り火」と呼ばれています。

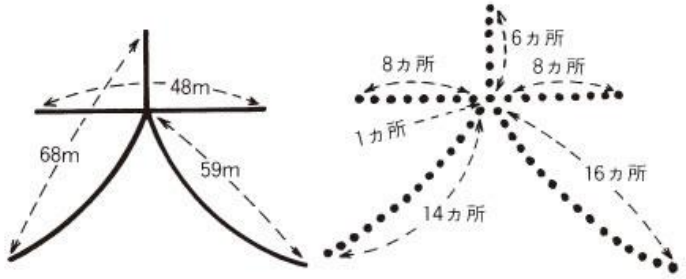
毎年たくさんの観光客で賑わう「京都五山の送り火」ですが、冥府に帰る精霊を送る盆行事のひとつであり、観光行事ではありません。広く一般に行われるようになったのは、仏教が庶民の間に深く浸透した中世〜室町時代以降と言われています。「京都五山の送り火」は、銀閣寺から発見された記録から、足利義政を創始者とする説が正しいようだと地元に伝わっています。
現在、京都市無形民俗文化財に指定されています。

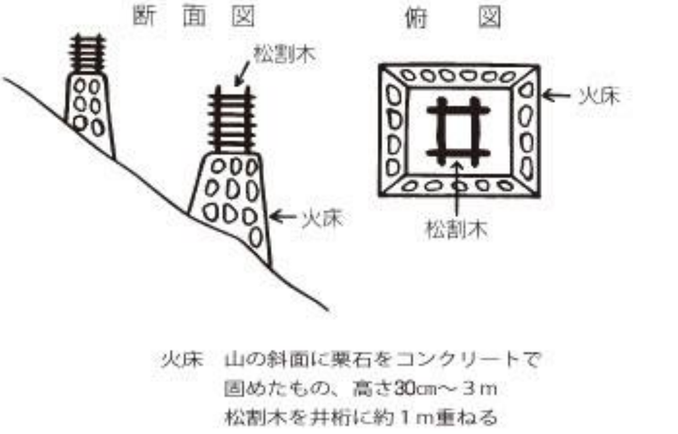
■左大文字について

左大文字の起源は、他の山の文字と同じく明らかになってはいませんが、『扶桑京華志』松生元敬著（寛文5年1665年）や『山城四季物語』（延宝年間1673〜81年）に記載が見られることから、江戸時代中期以降に灯されたと考えられています。

8月16日の夕方、菩提寺である法音寺から親火松明（長さ3m，直径20cm，重さ10kg）に火が移され、手松明40本と共に大北山（大文字山）山腹まで行列を行い、20時15分火床に点火されます。栗石をコンクリートで固めた火床は、斜面の傾斜によって30cm〜3mの高さがあり、その上に松割木を約1m、 井桁に積み重ねています。（火床数：53基。薪数：400束。護摩木：5,000本。）

（京都五山送り火連合会HP、左大文字保存会HPを参考にさせていただきました）





蛇足ながら、「大文字焼き」という表現は間違っているそうです。
京都人の前で口にすると、「ほ〜その大文字焼きゆうのは美味しいのどすか？」と言われるとか!?（笑）

次頁につづく

参加体験、2016年NHK-BS中継を観て

＜中継放送を観て＞
ご案内ありがとうございました。生憎雨となり松明を持つ人も大変そうでしたね。しかし大勢の人が山をあがっていく姿は荘厳でした。NHKはカメラ30台を準備し、様々な角度から「送り火」を紹介していました。六波羅蜜寺の「大」の字型の燭台にローソクがたてられ、読経がされている様子をはじめ、多くの人が合掌し亡き親族をおくるすがたには京都の人が送り火を大事にしている様子がわかりました。本当にいい放送をご紹介いただき感謝しています。

（名古屋本部／大13経済／奥田文雄）

＜中継放送を観て＞
同窓会関西支部が主催される「京都五山の送り火」鑑賞には、過去2回参加させて頂きましてありがとうございます。今年は残念ながら参加出来ませんでしたが、NHKの生中継で送り火の長い伝統とそれを支える保存会の方々の一年を通じたご苦労や尊いお気持ちも知ることとなり、日本人の心に共に通じる大切な文化との思いを一層深くいたしました。改めて開催にご尽力されている関西支部長の保高さんはじめ支部の皆様に深くお礼申し上げます。

（名古屋本部／大28哲学／加藤雅毅）

＜中継放送を観て＞
関西支部長保髙功氏から、鎌倉時代か室町時代に起源をもち毎年8月16日に行われる「京都五山の送り火」がNHK BSで生中継されるとの封書を受け取りました。私は平成20年8月16日、保髙氏所有の左大文字山（231m）にカルマノ学長らと登り観ました。丁度8時東山の右大文字に火が入り、妙法～船形～左大文字～鳥居へと点火される様子は忘れられないものでした。8月16日午後6時から30台のTVカメラによる生中継は、途中から土砂降りの雨、火が消えるのではないかと思う中、本番まで保存会の準備の人間模様も交えた3時間は見応えがありました。

（岐阜支部長／大13人類／尾関孝彦）

＜五山の送り火に参加して＞
保髙関西支部長の京都市長賞受賞を記念して開催された「五山の送り火」の集いに昨夏参加させていただきました。ダイナミックで勇壮な火文字、左大文字の火床の脇に立ち燃え上がる炎と煙に包まれたとき、亡き人々への感謝の思いが心の奥底から湧き上がってきました。今年はその五山の送り火がNHKでライブ放映され、思い出が蘇るとともに、改めてこのような伝統行事を現場で直に体験させていただいたことに厚くお礼申し上げます。

（名古屋本部／大24英米／中村弥寿子）

＜中継放送を観て＞
保高支部長の御厚意により、本年は29名の方が左大文字山に登られました。私自身は、昨年入山した思い出を胸に、京都の伝統行事を中継を通して拝見しました。最も印象的だったのは、お山ごとに火床や点火の仕方が異なるということです。特に左大文字には、読経とともに灯された松明を、麓のお寺から運び、山頂の火床に点火するという儀式があります。暗闇の中、重い松明を抱えて急な斜面を登るという保存会の方々のご苦労の程が偲ばれます。由緒ある送り火に参加させていただいた思い出とともに、送り火について改めて学ばせて頂く機会を与えて下さった支部長や保存会の皆様に心より感謝申し上げます。

（東京支部／大34教育／吉田静代）

＜中継放送を観て＞

一昨年の夏の貴重な体験を、ＮＨＫ中継を見ながら思い出していました。小雨降る蒸し暑い京都、左大文字山の麓から出発。会員（講のメンバー？）のみが着用できる専用のタスキと杖を持ち登り始めたが、想像以上に険しく山頂に着いたころには汗だくであった。しかし京都の夜景の素晴らしさ、点火する松明のやぐらの大きさに驚き、心を洗われるような気分で下山。これまで遠くから眺めていた送り火がわが身の近くの存在になった、忘れられない一夜でした。関西支部の皆さん、保高支部長ありがとうございました。

（東京支部／大18イスパ／渡邉美智萬侶）

＜五山の送り火に参加して＞

2016年8月16日、土砂降りの「送り火」が初体験でした。保高さん曰く「52年間でこんな大雨は初めて」と。黄色い声で励まされた沿道から滑る山道に変わる頃、山本先輩からハイッと松明を手渡され、凹みました。山頂からの京都の饒舌な輝き、パチパチと天に立ち昇る炎、様々な年齢層の頑張りを見て、まだ日本は大丈夫と感じました。「目に見える全ての事はメッセージ」なので、今日のそれは何かを探り、滑り、下りました。

（関西支部／大29人類／神 剛司）

＜五山の送り火に参加して＞

昨年に引き続き、五山の送り火の集いに参加させていただきました。昨年同様、澄み渡る空に京都市を一望できる左大文字山から、隣の送り火や、遠く市外の花火まで見ることができるやに期待するところです。ところが50年ぶりの大雨！火床のある山腹まで到着して、いざ点火。真っ赤に燃え盛る火床を見ながら大雨に打たれるという、他では絶対体験できないシュールで幻想的な体験は、一生の思い出です。

（関西支部／院47法務／吉岡良太郎）

＜五山の送り火に参加して＞

五山の送り火で、２つの不思議な体験をしました。１つ、初めて山神様に出逢えた事。２つ、亡くなった大好きな恩師と、夢の中でしみじみ語り合えた事。大文字山、山頂から鑑賞した、右大文字の灯り、美しい京都の夜景、地平線に小さく見える京田辺市の打ち上げ花火、心に残る素晴らしい光景です. 五山の送り火に参加できた事に、心から感謝致します。

（関西支部／大27英米／野村京子）

＜五山の送り火に参加して＞

2011年、家内と共に、みなさんの助けを得て参加させて頂きました。炎の熱さと荒々しさと、保存会の人の猛々しさが、遠くから眺める大文字の優雅さとは対照的でした。古の都を包む山々をキャンバスにして描かれる炎の芸術はなんと壮大なのでしょう。いつしか学生時代にのめり込んだ「受難劇」を思い出していました。パッフェスクエアをエルサレム入場から十字架の道行の舞台に見立てて演じたドラマ。しかし、送り火の壮大さにはとても及びません。しかも何百年も続いている伝統行事なのです。そして神事なのです。今でも圧倒的なスケールで瞼の奥に焼き付いております。

（関西支部／大32法律／村木正靖）

＜五山の送り火に参加して＞

2014年8月16日の夜、保高支部長の予告通りに昼間の土砂降りは止み、滞りなく「大」の字に火が灯されました。燃え盛る火床の傍らから見たものは、見慣れた夜景とは異なる白濁の街並み。そして雲の合間の漆黒に向かって舞い上る火の粉は、果たして冥土を目ざす御霊の姿だったのでしょうか。

（関西支部／大33経営／玉津雅己）

＜五山の送り火に参加して＞

50年ぶりの大雨も重なり、足元が悪く山道を登っているときは修行をしてるかのような錯覚に見舞われました。京都が見渡せる絶景の中、燃えさかる炎と水の競演は本当に忘れられない貴重な経験になりました。びしょ濡れになった私たち夫婦を気づかって着替えを京都の親戚の家まで奔走してくださった吉岡ご夫婦、優しく声をかけてくださった神先輩、山本先輩、橋本先輩、諸先輩の皆様、そして保高支部長、本当に感謝です。ありがとうございました。

（関西支部／大51国際経営／石川哲也）

＜2018年8月16日　配布資料に掲載＞

あなたは護摩木にどんな言葉をお書きになられるでしょう。
「京都五山の送り火」は400年を経過する伝統行事です。「五山の送り火」鑑賞会は、私と左大文字山（大北山）のご縁により支部活動に取り入れてきたものです。古都を巡る会や支部50周年総会などで幾度となく機会を重ね、優に三百名を越す方々にご参加いただきました。これまで大きな事故も無く皆さまに喜んでいただけた（！？）ことは、正に主催者冥利に尽きるというものです。残念ながら送り火鑑賞会は今回で最後となりますが、この機会に,これまでご参加いただいた方々やお世話になった方々に改めて御礼申し上げる次第です。
今宵は、京都の夏の風物詩をどうぞごゆっくりお楽しみください。
護摩木に託される思いがどうぞ叶えられますように。
そして今日の体験が美しい思い出となって、あなたの心に深く永く留まりますように。合掌

（関西支部(前)支部長／大19経済／保高　功）